

# 暴風雨の夜

小酒井不木

青空文庫



秋もたけなわ酣なる十一月下旬のある夜、××楼の二階で、「怪談会」

の例会が開かれた。会員は男女五人ずつ併せて十人、百物語の故事にならつて、百という数の十分の一に相当する十人が毎月一回寄合つての怪談会である。

今夜はF君が、最近手に入れたという柳糸堂のりゆうしどう「拾遺御伽しゅういおとぎ婢子ぼうこ」の原本を持って来て、面白そうな物語を片っ端から読みあげたが、そのうち、「逢怪邪淫戒ほうかいじやいんかい」と題する一篇から、はからずも、話に花が咲いたのであつた。物語の筋は、喜平次とい

う男が他たぎよう行すると、野中で俄にわかに日が暮れる。はるか前方に人家の灯影が見えたので、それをたよりに行きついて見ると若い美しい女が一人で居る。色好みの喜平次は思わずも引きつけられて、あつかま厚顔しくも女に言い寄ると、案外容易なびに靡いて、二人は怪しい夢を結ぶ。ふと、喜平次が夜半よなかに目を覚ますと、自分の傍に寝て居るのは、美人どころか異形の化物だったので、ヒヤツと言つて飛び出すと化物が跡を追つて来る。ようや漸く化物をまいてある里に辿りつくと、一軒の家で酒もりの声がする。喜平次は胸を撫で下し、その家に避難しようと思つて覗き込むと、意外にもそれは妖怪變化たちの集会で、そーらよい肴が来たと、中からみんなが追かけて来る。驚いた喜平次は又もや夢中になつて駈け出し、幸いに彼

等の追跡を免れて、ホツとしながら、ある里にはいると、鶏の聲がしたので、やれ嬉しやと思つて道を急ぐと、傍の木蔭から、鬼の形相をした白髪の老婆が、珍しや喜平次といつて抱きつき、ウンといつて彼は氣絶するという、怪談としては、ありふれた筋であつた。

ところが、この物語の前半が、会員たちの間に話の花を咲かせたのである。即ち、女にしろ、男にしろ、一しよに寝たものが、目がさめた時、異形の化物に代つて居たら、果してどんな氣持がするだろうかという問題であつた。もつと尤も、会員の誰もが、自分自身にはそういう經驗をしたものがないので単に想像説を述べるに過ぎなかつた。

「僕はやっぱり、喜平次のように飛び出して逃げるでしょう」と新聞記者のH君が言った。

「いや、僕は、恥かし乍<sup>なが</sup>ら、腰を抜かしてしまふだろうと思いません」と浮世絵研究家のB君が言う。

「わたしなら噛みついてやりますわ」と長唄師匠のS子さんが言った。

「大へんな勢ですなえ」と、四十恰好の医師のM氏が言った。

「僕は大きい男は気絶するだろうと思います」

「まあ」とS子さんは驚いた。「男の方はそんなに弱虫なんですか」と、皮肉な口調を交えて言った。

「気絶とは少々極端過ぎますね」と、H君も反対した。

「それは」と、医師のM氏は真面目な顔をして言った。「S子さんにしるH君にしる、そういうような事の起る、前後の事情を考えて見られないからです。化物でも幽霊でも、心に怖いとかやましいとか思つて居おればこそ出現するので、そうした心の動揺状態にある者の前に、今のような現象が起ればきつと気絶するにきまつて居おります。いや、気絶どころか、時には発狂します」

「でも、発狂とはあんまりのようで御座いますねえ」とS子さん。「いや本当です」

「それではM先生は何かそういう实例を御存じですか？」とSさんは抜目なく突こんだ。

「知らないでもありません」と医師のM氏は煙草に火を点じて、

意味ありげに、にやにや笑った。そこで、会員たちは、口を揃えて、M氏にそれを話すように迫った。

「では、兎とに角御話致かくしましょう」

こういつて、M氏はお茶を啜すった。

## 二

皆さんも御承知のことと思いますが、医師というものは自由な職業のようで可なりに束縛を受けて居るものです。生活難という悩みはどの職業にも共通ですけれど、医師はそれ以外に医師法や刑法の窮屈な条文から起る種いろいろ々な悩みがあります。こう言うと、



私が法律に反抗して、種々の罪悪を犯したがって居るのかと思ひになるかも知れませんが、決してそうではありません。私の言う悩みは刑法と人道との相容れぬときに起るものを言うのであります。一 ちよつと寸考えるとそんなことはありそうにないようですけれども実際にはあるのです。といつても抽象的な話では御わかりになりません。ですからこれからその実例を述べようと思うのですが、それが又、今晚の主題たる怪談とも縁故があるのです。

私は かりゆうびょう花柳病を専門として開業しましてから、二年目に妻を迎えました。私が二十五、妻が二十一でした。こうして、白髪の生えかかった今でも、怪談や探偵小説が好きですから、ましてその頃は至つて冒険的精神に富んで居おりました。似たもの夫婦とで

も言いますのか妻が又大の冒険家で、いつそ二人で映画俳優にでもなろうかと相談しあつたことさえありましたが、その頃は現今いまとちがつて、日本の活動写真界は極めて幼稚なもので、到底私たちの希望に叶いそうもありませんでしたから、無論その話は沙汰止みになりましたが、只今は、子供が五人もあつて、妻などはすつかり冒険的精神をなくしてしまい、私だけが、多少まだ冒険心を残して居るに過ぎません。

さて、結婚して半年ほど過ぎたある日のことです。夫婦生活も半年に及ぶと、少くとも私たちのような冒険好きなものに取つては聊いささか倦怠を覚えざるを得ませんでした。その倦怠を覚えかけたところへ、二十五六になる一人の男が診察を受けに来ました。診

察の結果、ばいどく 黴毒の初期だとわかりましたから、その旨を告げると、男は、

「先生、三ヶ月後に僕は結婚しなければなりませんから、それ迄に治して下さい」

と言いました。私はそれをきいて、直ちに、

「それは無謀です。少くとも結婚は一ヶ年御延しなさい。さもなければお嫁さんに伝染します」

と忠告しました。すると男は、

「それが、どうしても延すことの出来ぬ事情ですから、何とか方  
法を講じて下さい」

と頻りに頼みました。何を頼まれても、こればかりは、どうに

も仕様がなかったので、そのことを告げると、

「仕方がありません。この儘結婚します」と、彼は自暴自棄的に  
言いました。

私はぞつとしました。私は顔色をかえて、純潔無垢な花嫁に怖  
しい黴毒をうつすことは人道に反した卑怯ひきような行為であるから、  
たといどんな事情があろうとも、延期するのが男らしいではない  
かと懇々と諭すと、彼は却つて腹を立てて私に喰つてかかりまし  
た。医者はずつと患者を診療して居おればよい、余計な世話を焼く  
な、と、こういうのです。私も癩しやくにさわりましたから、「君がそ  
ういう料簡りようけんなら僕にも考えがある。僕は人道上、花嫁に事情  
を告げるだけだ」と申しました。

これをきいた彼は益々怒り出しました。彼は某大学の法科を出たので、相当に法律の知識に富んで居たと見え、「他人の秘密をあばくなら、刑法に触れるから、それを覚悟でやるがよい」という意味の捨科<sup>すてぜりふ</sup>白を残して、さっさと帰って行きました。

皆さん、従来、日本では黴毒患者の結婚ということが、左程<sup>さほど</sup>の大問題とはなつて居ないようですが、私は花嫁となる人が気の毒でなりませんでした。如何にも刑法の規定に依<sup>よ</sup>ると、医師は業務上取扱つたことで知り得た他人の秘密を故なく漏すと罰せられることになつて居<sup>お</sup>りますが、純潔無垢な花嫁に黴毒をうつすことが罪にならないで、それを妨げるのが却つて罪になるのですから、悩みを感じざるを得ないじゃありませんか。私も刑法に触れてま

で、その男の秘密をあばく気にはなりませんでしたが、私には妻に向つて、ひそかにこの悩みを打明けました。すると、妻は私に非常に同情し、結婚するその娘さんを救うのは、あなたの義務だと申しました。然し、法律に触れないでどうしたなら、その娘さんを救うことが出来ましようか。そこで私たちは種々相談してその手段を考えましたが、もとより、良い方法のある筈はありませぬ。

何はともあれ、先ず、彼と結婚する娘の身許を探らねばならぬと思ひ、種々探索の結果、件の男は××区のある旧家へ養子をすゝめるのだとわかりました。驚いたことには、あの時彼自身の口から三ヶ月後に結婚するといったに拘かかわらず、三週間過ぎると結婚して

しまいました。養子先は加藤という財産家で、さほど大きな邸宅ではありませんが、旧幕時代からあつて、可なり広い庭園にかこまれて居ました。娘の名は友江といつて十九歳の美人、養子となつた彼の名は信之ですが、信之は元来、加藤家の財産を宛に養子をしたらしく、彼が「延すことの出来ぬ理由」といったのは、延せば他から養子を迎えるという虞おそれに過ぎぬようでした。そうしたさもしい心の持主である上に、身体までが病毒に汚されて居たのですから、加藤家こそいい迷惑です。況いわんや無邪気な友江さんは尚なおさら更可哀相なものです。友江さんは文字通りの箱入娘で、世間のことは何一つ知らず、良人おとこ一人を後生大事かしずと侍まじいて居るのでした。

養子を貰つて安心したせいか、又は偶然か、加藤家の老夫婦は、友江さんが結婚してから半年たたぬうちに相次でなくなりました。友江さんにとっては、この上もない不幸ですが、信之に取つては思わぬ幸運が来たものといわねばなりません。彼は養父母を失うと、それまで勤めて居た会社をやめて家にひっこんでぶらぶら暮して居ました。

皆さん、そうした状態に置かれた加藤家が首尾よく栄えようとは想像出来ないでしょう。何か暗い運命が落ちかかつて来るだろうことが誰にも予期されません。全く、その通りで、恐しい運命の手は、先ず、無垢な友江さんをとりこに致しました。即ち、友江さんは、私が信之に予言したごとく、彼の怖しい病気に感染したので



あります。

加藤家には、旧主人に愛された老婆が一人雇われて居おりましたが、信之は、何かにつけて、うるさく思い、養父母の死後、間もなく暇を出して、若い女中とかえました。然し、その女中は一月たために暇を取り、それから後は、来る女中も、みんな、早いのは一週間ぐらいで暇を取りました。その理由は後にわかったことですが、信之は、それ等の女中に不倫にも言い寄つたらしいのです。それは一つには、信之の淫蕩な性質しかが然らしめたのでありますが、又一つには友江さんの容色が日に日に衰えて行つたからでもあります。いう迄もなく、その恐しい病氣のために!!

皆さんは黴毒の二期、三期の患者の世にもみじめな姿を御存じ

ですか。感染してから半ケ年も過ぎた頃には、顔から身体中に種々の吹出ものが出ます。唇の色は蒼白くなつて、口中は石榴ざくろのようになだれます。そのみならず、ことに女にとつて一ばん恐しいことは、髪の毛が束になつて抜けることです。一櫛くしごとにはらはらと、いや、はらはらどころか、こつぽりと抜けて来ます。皆さんは義太夫の「四ツ谷怪談」の文句を御承知でしょう。女主人公のお岩が、毒薬をのまされて、にわかには顔がはれ上り、髪の毛の抜け落ちるところに、

「しんき辛苦の乱れ髪、びんのおくれも気ざわりと、有ありあうき合鏡

台ようだい抽斗ひきだしの、つげの小櫛くしもいつしかに、替り果てたる身の

憂うきや、心のもつれとき櫛くしに、かかる千筋ちすじのおくれ髪、コハ心得

ずと又取上げ、解くほどぬける額ひたいがみ髪、両手に丸めて打なぐめ……」

とありますが、本当にこのお岩そっくりの相好といってよいのが、黴毒患者の状態であります。

どうです、皆さん、無邪気な加藤家の一人娘友江さんは、伊右衛門ならぬ良人おっとのために、お岩そっくりにされてしまったのです。今に何か恐しい怪談じみた出来事があっても誠にふさわしい事情ではありませんか。皆さん、実際、これからが、私のお話ししようとする怪談の本筋に入るのです。

さて、自分の妻が病氣のために、こういうなさげない姿になつたら、いや、すでに、かような進んだ状態にならぬ前に、世の常の良人おつとならば、必ず医師にかけるのが当然でありましょう。ところが信之は無情冷酷といつてよいか、何といつてよいか、友江さんを医者にかけなかつたのであります。医者にかければ、直ちに黴毒と診断され、彼のうつしたものであることが妻に知れるのを怖れたからであります。たといおとなしい妻でも、事の真相がわかれば、どんな態度に出るやらわからず、又場合によつては、医師が智慧をかして、そのため離婚の訴訟などを起されてはならぬと思ひ、彼はそのままに捨てて置いたのであります。何も知らぬ

友江さんは、ただもう自分の不運とあきらめて、その日その日を送ったのですが、信之は後に友江さんの姿を見ることにさえ一種の不快感を感じるに至りました。それがため彼は外出して、その不快の念を晴らそうかとも思いましたが、留守中に友江さんが医者を訪ねるようなことがあつてはならぬからと、家にも引込み、従つて彼は性的興奮にかられて、女中に手をつけようとしたのであります。

すべて運命の神は、一旦その手をもつて人を虐げにかかると、どん底まで引き込まねばやまぬものですが、可憐の友江さんもその例に洩れないで、**黴毒**は遂に彼女の脳を冒し、精神に異常を来したのであります。かような精神異常は、**驅くばいり療ようほう法**を行えば、

すくなおるのですが、何しろ一度も医師にかけぬのですから、精神異常は日に日に重くなるばかりでした。ことに友江さんは妊娠中だったので、たださえ女子の妊娠時には、精神異常を来し易いのですから、ますます悪い条件が重なった訳です。始め高度の憂鬱状態に陥った彼女は、度々自殺を計るようになりましたので、さすがの信之も閉口して、日夜、警戒監視を怠りませんでした。

かような事情の中へ、新らしく一人の女中が出かわって雇われて来ました。彼女は名を沢と言って相当な美人で、一見すると良家の子女のように見え、年は友江さんより一つ二つ上らしく、非常に気転がききましたので、信之は沢によつていつしか心の虜にされてしまったのです。実際、この女中が後に信之の身を滅ぼす

困もとになりましたが、細君に持ちかねて居るところへ、細君よりも、はるかに世間的知識に富んで居る女があらわれたのですから、やがて、どんなことが起るかは皆さんにも大方想像されるだろうと思ひます。而しかも、これまでの女中は、信之が言い寄ると、みんな、すぐ様暇を取つて歸つて行つたのに、沢は逃げるどころか、却つて彼に対して一種の好意を見せて居るようなので信之の心はすっかり掻き乱され、彼の沢に対する恋は日に日に猛烈になつて行きました。

すると、友江さんは、精神に異常を来しながらも、信之の沢に対する心持を感知したと見え、はげしい嫉妬にかられては、沢の頸筋をつかんで殴ることさえ屢しばしば々しばしばありました。然し沢は、何か

野心を持つて居たと見えて、ただ笑つて居るだけで、少しも、つらいとも居にくいとも申しませんでした。これを見た信之は益々友江さんを憎んで、沢に同情し、遂に友江さんを、土蔵の中に監禁すると言ひ出しました。沢は始め反対しましたが、結局信之の言葉に従つて、友江さんを土蔵に押しこめました。けれど、沢は深切に友江さんの面倒を見ました。土蔵の戸の鍵は沢が預つて居て、友江さんの食事も土蔵の掃除も沢がかかりきりでしたが、信之は、友江さんを監禁してから、一度も見舞に行きませんでした。自殺の虞おそれあるものを、土蔵に監禁するなどということは、随分危険な話でしたが、沢に心を奪われた信之は、今では、結局、友江さんが自殺でもしてくれたいと思つたらしいのです。



ところが、運命というものは誠に皮肉なもので、始め憂鬱状態にあつた友江さんは、段々病が進むにつれて発揚状態にかわりました。多分妊娠の進んだせいもありましよう。従つて近頃では自殺どころか、頗るすこぶ陽気になつて、時々、土蔵の中から彼女の歌う声が洩れることさえありました。然し庭が広いので、余所よそへ知れる心配はなく、實際友江さんが、家続きの土蔵に監禁されて居ることを知つて居るものは信之と沢の外には一人もありませんでした。

さて、友江さんが土蔵に監禁されると、広い家には、信之と沢との二人きりです。そうなると皆さんも想像されるごとく、信之は、盛んに沢に言い寄りました。然し、沢は、好意は見せても、

断然その身を任すことはしませんでした。すると信之は日に日に焦燥の情を増しました。後には暴力にまで訴えようと思いましたので、とうとう沢も決心して、奥さんが生きて見える間は決して、御言葉には従いませんと言い切りました。

さあ、そうになると、恋に狂った信之の取る手段は何でしょう。言わずと知れて居おります。

妻をなきものにしよう……

沢はある夜、信之の晩酌の相手をしながら、信之の言葉とその眼の色によつて、友江さんを殺せつがい害する意のあることを悟りました。彼女は自分が信之に言った言葉を後悔すると同時に、これは十分警戒せねばならぬと覚悟致しました。

## 四

ある夜、恐しい暴風雨が市街を襲いました。宵から降り出した雨は車軸を流し、風は獅子の吼ゆるような音を立てて荒れ狂いました。そういう晩は健全な人をも異常な心境に導くものです。信之は沢を相手に、頻りに酒杯を傾けましたが、だいぶ酔がまわつて来てから、突然、友江を見舞つて来るから、土蔵の鍵を貸してくれと沢に申しました。沢は頻にとめました。どうしてもききません。そこで、沢は一しよに行くと言いましたが、信之はそれをも承知しなかつたので、彼女は仕方なく鍵を渡し、恐しい暴風

雨の音をききながら、がらんとした家の中にちぢこまって居おりました。

暫らくすると信之は顔色をかえて、走つて来ました。

「沢、友江が首を吊つて死んで居る」と、彼は提ちようちん灯をも消さないで沢に告げました。

「ひえッ！」といったかと思うと、沢はその場に気絶して仰向きにたおれました。信之は愈いよいよ慌てて水を取りに走り、それを沢の口へそそぎかけました。沢は凡そ二時間あまりも意識を恢復しませんでした。やつと、眼をさますと、むっくり起きて、室内の一隅を指し、

「あれ、奥さまが！」

といつて顔を蔽いました。信之も流石さすがにぎよつとしたらしいでしたが、

「馬鹿な、誰も居やせん」

「いえいえ、たしかに今、奥さまが、髪を振り乱して、そこに立つて見えました」

「そんなことがあるものか」

「それじゃ、もう一度土蔵の中を見て来て下さいませ」

信之は、気が進まぬらしかったけれども、沢が頻に頼むので仕方なく、又もや、提灯をともして土蔵の中を見に行きました。そのとき暴風雨あらしは益々はげしくなりました。

暫くすると信之は、土のように蒼ざめて帰って来ました。提灯

を持つ手が、ぶるぶる顫えて居たので、沢はただならぬことが起きたと思いました。

「どうなさいました？」と沢はたずねました。

信之は沢の顔を見つめるだけでした。

「旦那様、どうかなさいましたか？」と、沢は再びたずねました。信之は先刻さっきから、モルヒネを飲んだ患者のように、ぼんやりした眠たそうな顔をして居ましたが、その眠たそうな顔の中にも、恐怖の色がありありと見えました。

「実は、友江の死体が、消えてなくなつたんだ」

と、信之は、この世ならぬ声で申しました。

「ひえッ！」と又もや沢はその場で気絶しました。無理もありま

せん。それは正しく友江さんの死体が幽霊となった証拠ですから！

信之は、こんどは、何思ったか、水も持って来ないで、沢の気絶した姿を微笑しながら眺めて、頻に酒を飲みましたが、やがて、沢を抱き上げたかと思うと、寢室の方へ運び、手早く敷蒲団を敷いて沢を寝かせました。次で自分はその傍ついでに坐って、うるんだ眼を情慾に輝かせつつ沢を見つめて居ましたが、どうした訳か、頻に眠気を催し、沢の身体に手をかけたかと思うと、そのままぐつたりと横になって寝入ってしまいました。恐らく彼は幽霊の魔法にでもかかったのでしょう。

幾時間かの後、信之は眼をさしました。それはまだ夜の明け

ぬ前で、暴風雨はその時幾分かその勢を弱めて居ました。信之はもはや酔もさめたと見えて、顔を上げて怪訝けげんそうにあたりを見まわしましたが、ふと冷たいものが手に触れたので、その方を見るなり彼はぎよつとしました。

皆さん！ 信之の傍に寝て居た筈の沢は、いつの間にか、一尺に足らぬ、女の赤ん坊の死骸とかわり、而もその赤ん坊の全身の皮膚は恰あだかも熱湯をそそいだかのように焼けただれて居ました。げに恐しい幽霊の復讐です！

「イヒヒ、ウフフ、アハハハハ」

信之は突然その赤ん坊の死骸を抱き上げて、気味の悪い笑い声を発しながら、室の中を走りまわりました。彼は引き続き恐怖の



ためにとうとう発狂してしまったのです。その時暴風雨は更に勢を増して、室内を照す電灯の珠が頻たまに揺れました。

## 五

皆さん。私の怪談の本筋はこれで終わりました。申す迄もなく信之が発狂したのは、単に沢が、怖い姿の赤ん坊に変わって居たということばかりではなく、実は、信之は暴風雨あらしに乗じて友江さんを絞殺し、縊死いししたように見せかけて置いたのでして、その為に起った良心の苛責がその主要な原因となったのでした。

さて、皆さんは、恐らく、この怪談の真相を御ききになりたい

だろうと思いますから、簡単に説明して置きます。この怪談こそは、冒険心に富んだ私と妻との書いた狂言に外ならぬのでした。もはや御察しのことと思いますが、信之の心を奪った女中の沢は、私の妻だったのです。私たちは、是非とも、友江さんを救いたいと思つて、種々取り調べた結果、友江さんが蠱毒にかかったことや女中が度々出かわることをきき出しました。そこで妻は女中となつて住みこみましたが、最早やその頃、友江さんの病氣は可なりに進んで居ました。友江さんを盗み出して治療するのは訳のないことですが、何とかして、信之に、十分悔悟させてやりたいと思つたものですから、時機を待つことにしたのです。妻と私とは無論度々秘密に会見して手筈を定め<sup>き</sup>ることにしましたが、愈よ妻

が信之に友江さんを殺そうとする意志のあることをたしかめましたので、その翌日の夜から、私は毎晩、ひそかに加藤家をたずねて、警戒致しました。するとその暴風雨あらしの晩が来ました。私は今夜は何か起るにちがいないと、土蔵を監視して居ますと、果して信之がやって来ました。彼はいきなり手拭をもつて友江さんを絞殺し、友江さんの紐を解いて死骸を梁に吊し、逃げるようにして去って行きました。彼が若し刃物をつかったならば、飛び出して妨げるつもりでしたが、絞殺を行いましたからにはらし乍らも、時機を待つて居ました。彼が立ち去るなり、私は手早く、友江さんを下し、人工呼吸を施しますと、間もなく息を吹き返しましたので、かね予て妻と打合せてあつた室に運びこみました。すると程な

く、友江さんは産気づきました。生れた子は黴毒のために恐しい姿となつて死んで居ました。友江さんが窒息したので、胎児も窒息したのです。胎児は七ヶ月ぐらいのものでしたからとうとう助かりませんでした。一方妻は、かねて酒の中に催眠剤を入れて置きましたので信之は氣絶を装つて居た妻に暴行を加えない先に眠つてしまいました。そこで私たちは、生れた胎児を彼のそばに寝かして置いたのです。

この狂言は、すべてが機チャンス会に任せてありまして、いざというときには、私が飛び出す手筈になつて居ましたが、妻が巧みに働いてくれたので、幸いに、私は顔を出さずにすみしました。私たちはただ、信之に大きな恐怖を与えて、改心させようとしたのです

が、少し薬がききすぎて、彼は発狂してしまいました。友江さんの発狂は、その後駆癒療法を施した結果、完全になりましたが、信之はとうとう恢復しませんでした。考えて見れば、彼は友江さんを一旦殺したのですから、それが当然の罰かも知れません。いや、私も妻も、若気の至りとはいえ、随分立ち入った冒険をしたものです。それにしても、皆さんは私の長話に定めし御退屈をなさったことでしょう……」



# 青空文庫情報

底本：「怪奇探偵小説名作選」 小酒井不木集 恋愛曲線」ちく  
ま文庫、筑摩書房

2002（平成14）年2月6日第1刷発行

初出：「講談倶楽部」

1926（大正15）年1月号

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：川山隆

校正：宮城高志

2010年4月19日作成

2014年2月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# 暴風雨の夜

小酒井不木

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>